

「手縫いをしてみよう」の授業

附属名古屋小学校 熊谷佳代 海野康之
家政教育講座 加藤祥子 伊深祥子

家庭科分科会では、附属名古屋小学校の「手縫いをしてみよう」を事例研究に取り組んだ。はじめに授業を伊深が授業を参観者として語る。つぎに授業者である海野が実践者として授業を語る。最後に加藤が被服構成の視点から授業をみる。

手縫いの授業で子どもが「わくわく」したのはなぜだろう

家政教育講座 伊深祥子

1 はじめに

本稿では、海野さんの「手縫いをしてみよう」の授業を参観者として語る。参観者として授業の場で何を見、何を感じ、授業をどう解釈したかをナラティブに語ることを試みる。佐藤（1996）は、事例研究における「記述と分析」は教室の出来事や経験の意味を明らかにし、その出来事や経験の意味のかかわりの探求し、そこに成立している新しい可能性を洞察する探求であるとする。事例研究では、教室の事実に対する素朴な印象も重視されるべきだし、その意味を開示するために比喩的な表現や文学的な表現も尊重されるべきであろうと述べている。そして、「ナラティブ認識」は実践的な認識を豊かにする方法であるとしている。

近年、授業研究の方法として質的研究方法が注目されてきている。質的研究方法が注目されている理由は、授業という現象があまりにも複雑で、その授業一回の特別な内容を含んでいるからである。そのような複雑で特殊な一回きりの授業という現象を、量的研究だけで捉えることは難しい。そこで注目されてきている質的方法にはさまざまな種類があり、どの方法をとるかで授業のどの側面を切り取ることができるかが決まってくる。本論で行うナラティブな授業研究の方法やエピソード記述という質的研究方法は、ひとつの授業における体験の意味を捉え、新たな問いを立ち上げ、つぎの実践へとつながっていく研究方法である。ナラティブな授業研究方法はつぎのような特徴をもつ。

- * 教師は一人称で登場する・・・・・・・・・・本論では、授業を観察する「私」として一人称で語る。
- * 子どもが固有名で登場する・・・・・・・・・・本論では、子どもの名前が不明のため固有名は書けないが、できるだけ子ども一人ひとりの個人の様子がわかる記述を試みた。
- * 出来事の成立した複数の根拠や意味のかかわり（因縁）の分析（因果関係ではなく）
・・・・・・・・・・ 3 なぜ子どもは授業で「わくわく」したのかで記述を試みた。
（稲垣忠彦・佐藤学.（1996）.「授業研究入門」, p134.より）

ナラティブな授業研究の語りとは、特定の教室に生起する個別、具体的な経験の意味の解明をめざしたものであり、主観を尊重した「物語的（ナラティブ）認識」を追求するものである。海野さんの「手縫いをしてみよう」の授業を参観者として主観的に語ることで、海野さんの授業の事実からなぜ子どもが授業で「わくわく」したのかを考えてみたい。

2 教室に入る

本年度の大学の担当は青木先生で、私は初めて名古屋付属小学校の授業を参観させていただくことになった。青木先生から「貫頭衣の授業」をすると聞いて、貫頭衣でどんな授業をするのか楽しみに教室に向かった。自分自身は中学校の授業で貫頭衣の授業をしたことはあったが、それは被服構成として扱いであった。貫頭衣で「縫う」授業とはどんな授業なのだろうと思いながら教室に入った。

家庭科室は南と北の両側に窓があり、明るくて広々した教室だった。子どもたちは4人ずつ10グループに別れて座っていた。グループの人数は6人ではなく4人で、話し合いや活動がしやすい人数になっていた。授業が始まった。導入は衣服の始まりである。子どもたちは元気に手を挙げ、毛皮からとか葉っぱからとか自由に発言していた。子どもの発言を受け止めながら、海野先生は昔の人がどのように布を織ったのかを絵を使って説明して下さった。説明を聞いていると、海野先生自身が布を縫うことについて興味を持って、たくさん勉強したことが参観者の私にも、授業を受けている子どもたちにも伝わってきた。しかし、ここまではよくある授業である。子どもがわくわくしたのはここからの授業である。説明が一段落してから海野先生が子どもたちに見せたのは、幅30cmの古そうな麻の布である。本当は古くはなかったのだが、海野先生が大切そうにその布を出したので、古い布なのかと思ってしまった。子どもたちも古い貴重な布だと思ったらしく、どこで手に入れたのか先生に質問していた。海野先生の説明によると、昔は幅が30cmでしか布を織ることができなかったらしい。昔の幅の30cmの布を縫い合わせて貫頭衣をつくろうというのが、きょうの授業のめあてであった。不勉強で申し訳ないが、私は貫頭衣とは布に頭をとす穴を空けているのだと思っていた。頭を貫くと書くのだから当然穴を空けると思い込んでいたのである。きょうの授業は、布の幅が狭いので縫い合わせて貫頭衣をつくるということだったのだ。私はこの時初めて貫頭衣と「縫う」というきょうの授業の目的の理解できた。

2 布を縫う

いよいよ布を縫う作業である。先生が準備室から布と縫う道具をグループ毎に箱に入れて運んできた。この時、子どもたちが縫う布が、さっき先生が大切そうに見せてくれた麻の布と同じものがグループ分用意されていることに、子どもたちも私もちょっと驚いた。あの布を縫うんだ、と驚いたのである。古いものではないが、貴重な感じの布を自分たちのために先生が用意してくれたことが嬉しく感じられているようだった。実はこの布がきょうの授業にとって大きな意味があることに私が気づいたのは、子どもたちが布を縫い始めてからであった。

グループに配られたのは、30cm幅の麻の布4枚・大きな縫い針2本（玉どめがされた赤い太い糸が通してある）・編まれた麻の紐（あとで貫頭衣の腰を縛るもの）である。先生が縫い方の説明を丁寧に下さった。特に安全に留意した説明であった。ほとんどの子どもが初めて布を縫う体験をするらしかったので、怪我をしないようにていねいに注意点の説明があった。きょうの授業だけでなく、これからの授業でも安全に気をつけるようにていねいに安全に関する注意がされた。つぎに縫う手順が説明が説明された。はじめに2人で2枚の麻布を縫い合わせて1枚の大きな布にする。つぎに大きな布2枚を肩の部分で縫って4人で協力して貫頭衣を完成させるという手順である。自分たちに出来るか少し不安そうな子もいたし、早く縫ってみたいくてうずうずしている子もいた。

まず、2人組で2枚の麻布を縫いはじめた。先生に言われたとおり、しっかり安全に注意して作業がはじまった。何しろはじめて布を縫う子どもたちがほとんどである。どうやったらいいのか戸惑いながらも2人で協力して縫い始めた。初めのうちは、布をちゃんと押さえていないので曲がってしまう子もいた。丁寧に縫いすぎて時間がかかりすぎている子もいる。縫い目が荒すぎて縫っている意味のないことに途中で気づき、細かい縫い目で縫いなおしているグループもいた。制限時間内に完成することが難しいことに気づいて、教えていないのに大針小針で縫っている子もいた。試行錯誤しながら2人で協力して、やっと2枚の麻布を縫い合わせて大きな布にすることができた。つぎに4人で今縫い合わせた布を肩の部分で縫い合わせる作業に移った。2人組での作業の後であるし、縫う量も少ないので、今度は曲がらず、しっかり押さえて、程よい縫い目で肩をきちんと縫えているグループが多かった。ここでも自分たちで考えて縫

い目がほどけないように端を返し縫いしているグループも出現していた。だんだんと衣服の形が出来上がってきた。子どもたちは楽しそうに出来上がった貫頭衣を順番に身に着けて写真を撮ってもらった。どの子も誇らしげである。貫頭衣を着るときに90度回転させて身に着けると、袖のようになることを発見しているグループもあった。60分の授業で、4人で協力して自分たちが身に着けることのできる衣服を縫うことが出来た。交代で全員が試着をした。どの子も満足そうに写真に収まっていた。写真を撮り終えてから片づけをして授業のまとめとして感想をいくつか発表して授業は終了した。

3 なぜ子どもは授業で「わくわく」したのか

授業後の感想に「わくわく」と書いていた子どもがいた。「わくわく」とするというのはこれから何が起きるのか、という期待感の表れである。授業で自分が何かをやり遂げたという満足感もあったのだろう。なぜこの授業で子どもが「わくわく」したのか、出来事の成立した複数の根拠や意味のかかわり（因縁）の分析を試みる。

① ひとり一人が活躍する場があった

全員が布を縫うという作業に参加することのできた授業であった。それもグループの4人で協力して貫頭衣を完成させるという作業である。自分が縫うこと、自分の縫ったひと針ひと針がこの授業で絶対に必要なことだった。40人ひとり一人が活躍することで授業が成り立っていたと言える。自分が「縫う」ことがなければこの授業は成立していなかった。自分が授業に参加したという感覚がこの授業ではあった。

② 縫うという作業の中で自分が工夫する余地があった

2人で縫う時も、4人で縫う時も、先生からは安全上の注意はあったが、こうしなければならないという指示はなかった。だから、縫い目の大きさも自分たちで考えていた。布を引っ張って曲がらないようにすることが必要なことに作業を通して気づいていた。返し縫いの工夫を自分たちでする出来事が起きていた。自分で考えて縫うことに挑戦していた姿が多く見られた。試着するときにも、回転させて試着すると袖になることを発見するグループもあった。そういう自分たちで工夫する余地があったこと、自分たちで発見することがあったこともこの授業で子どもがわくわくした一つの原因であろう。言われたとおりに、少しのくるともなくきちんと縫えたわけではないが、先生の指示どおりだけではなく、工夫する余地があったことはこの授業の重要な部分である。

③ 教材が子どもの作業に適していた

用意されていた麻の布の目の粗さと布の硬さが、子どもたちが初めて縫うという作業に適していた。あれ以上目が細かくては縫うのに時間がかかってしまい、完成させることが難しかったし、柔らかすぎてもピンと引っ張ることができずに縫いにくかった。布の選び方が違っていたら、縫うことの大変さが縫うことの楽しさに勝ってしまっただろう。教材としての布の選択がこの授業にとって大きな意味があった。はじめは古そうで高級そうな布だなあと見ていたが、布目の大きさ、布の硬さを考慮した教材の準備がこの授業において重要であった。

④ 完成させて身に着けるという喜びがあった

「縫う」というと練習用の布で、なみ縫いの方法を学ぶことから始めることが多いのではないだろうか。この授業では、作業をとおして、縫うとはどういうことかがわかり、最後に自分たちで協力してできた作品を身に着けることが出来た。おしゃれな編んだ麻ひもも用意してあったので、まるで古代の人のように全員で着ることができて満足の笑顔が溢れていた。

⑤ 協力すること

この授業で子どもが個人で考えるという場面は、最後のまとめのときだけであった。特に作業では、2人組で布を縫ったあと、4人でその布を完成させるというグループでの協力が貫頭衣を完成させていった。個人で学ぶことも必要であるが、教室という空間で起きる学びの醍醐味は、やはりほかの生徒と協力したり、ぶつかったりして起きる学びである。この授業全体が、グループのなかでの協力や葛藤をとおして学びを形づくっていた。

はじめて針と糸をもち、「縫う」とはどういうことかを体験させる導入の授業として、子どもが「わくわく」して取り組めた実践であった。短い時間で完成させたので、まとめの時間があまり取れなかったことが残念である。「わくわく」した子どもの感想も発表させたかった。縫う時にどんなことに工夫したのか(縫い目の大きさをどうしたのか、縫い終わりはどうしたのかなど)も発表して共有できるともっと授業が深まったと思う。しかし、家庭科の授業で布に触れ、グループで協力して布を縫う体験をとおして、子どもたちはたくさんのことを学んでいた。これからの授業で、縫い目の大きさとか、玉結び、玉どめ、返し縫い、待ち針の打ち方といった細かい技術について、この授業をすることによってより楽しく意欲的に学んでいくことだろう。

4 おわりに

家庭科は料理・裁縫だけの教科ではないといわれる。ただモノを作って終わる教科ではないといわれる。鶴田ら(2008)は家庭科で学ぶ内容としてつぎの3つをあげている。モノづくりは①の内容である。

- ① 生活の文化(知識や技術・技能)
- ② 生活の諸環境
- ③ 民主的な家族

さらに家庭科は単に技術的なことが「できる」ことだけを求めているのではないとし、役に立つ授業構築に向けて3つの授業方法を提案している。モノづくりの授業においても①～③の授業方法を取り入れることが必要であるとしている。

- ① 「気づく」「考える」授業
- ② 問題解決学習
- ③ 生活をみつめ、自己をみつめる授業

もちろん家庭科はモノをつくって終わるだけの教科ではない。鶴田らの提案はこれまでのモノづくりで終わっていた家庭科からの脱皮をめざしたものである。しかし、海野さんの授業で子どもたちが布と格闘している姿を見ていて、家庭科におけるモノづくりの意味をもう一度とらえ直すことが必要ではないかと考えるようになった。家庭科は単なるモノづくりではないが、現代だからこそ必要なモノづくりからの学びがあるのではないだろうか。内田(2007)は、自分たちの時代はお手伝いをするのがはじめての社会的活動であったが、今の子どもたちは、その過半数が生まれてはじめての社会経験が、買い物になっていると述べている。内田は、子どもたちは「消費」することから社会的活動をスタートさせているとする。そしてそのことは、どのような場面でもまず買い手として名乗りを上げる、自らを消費主体として位置づけているのではないかと指摘している。消費するということは、自分にとって価値があると思ったモノに対してお金を出すということ、等価交換するということである。逆に言えば、価値がないモノにはお金を出さないということである。消費者としての子どもは、自分にとって価値があるかないかを判断する人として立ち現れる。消費することだけで失われているものは何か、消費主体である子どもたちがモノをつくることにはどんな意味があるか、これまでとは違う視点でモノづくりの意味を考えていくことが必要なのではないだろうか。家庭科という教科はモノづくりで終わる教科ではない。しかし、家庭科はモノづくりをとおして学ぶという特徴をもっている教科である。海野先生の「手縫いをしてみよう」の授業から立ち上がった課題は、家庭科におけるモノづくりの意味を再評価することの必要性である。

秋田喜代美・藤江康彦.(2007). はじめての質的研究法. 東京: 東京図書.

稲垣忠彦・佐藤学共著.(1996). 授業研究入門. 東京: 岩波書店.

鯨岡峻.(2005). エピソード記述入門. 東京: 東京大学出版.

鶴田敦子・伊藤葉子.(2008). 授業力UP家庭科の授業. 東京: 日本標準.

内田樹.(2007). 下流志向. 東京: 講談社.

「手縫いをしてみよう」

附属名古屋小学校 海野康之、

1 実践の目的

子どもたちは、家族のために工夫して実践したことを家族から認められたとき、大きな喜びを感じる。それは、ほめられたことへの満足感だけでなく、これまでの「してもらい自分」が家族のために「してあげられる自分」へと成長したことを自覚するからであろう。私たち家庭科は、このように子どもたちが主体的に家庭生活にかかわる中で、自立した生活者へと成長していくことを願っている。

子どもたちが主体的に家庭生活にかかわることができるようにするためには、『生活にかかわる物やこと』と家庭生活とのかかわりを意識して知識及び技能を自ら進んで身に付けようとする態度を育てる必要がある。そのためには、題材における始めの段階である〔出会う段階〕で設定する学習課題を、学習を通して得る『生活にかかわる物やこと』についての知識及び技能を家庭生活でも活用してみたいという思いをもたせた上で設定する必要があると考えた。そうすることで、その題材を通して、常に家庭生活中で活用することを意識して『生活にかかわる物やこと』についての知識及び技能を身に付けようとする子どもたちを育てることができると考えた。

2 実践内容

(1) 題材

5年生 「手縫いをしてみよう」

(2) 題材について

本題材は、衣服の成り立ちを体験したり、手縫いにおける基本的技能を学習したりして、実際に手縫いで布製品の製作を行う題材である。

ここでは、まず、縫うことの意味を知らせたり、その仕組みについて実感させたりする。その上で、学習コーナーを利用したり、簡単な小物作りを行ったりして、手縫いの基本的な技能を身に付けさせる。そして、実際に生活に役立つ布製品の製作を行わせ、目的に合わせた縫い方を身に付けさせる。これらの活動を通して、日常生活において、手縫いの技能や知識を生かすことができるようにさせたり、衣生活への見方を広げさせたりすることがねらいである。

(3) 題材目標

- 手縫いの製作に関心を持ち、学習課題を解決しようと学習に進んで取り組もうとすることができる。
(関心・意欲・態度)
- 目的に合わせた縫い方に気を付けて、手縫いの作品を丈夫さや見た目を考えながら、工夫して製作することができる。
(創意工夫)
- 目的に合わせた縫い方に気を付けて、製作に必要な用具を安全に取り扱いながら、手縫いの作品を製作することができる。
(技能)
- 目的に合わせた手縫いの方法を理解することができる。
(知識・理解)

(4) 指導計画（12時間完了）

段階	題材の流れ
出会う	1 『縫うこと』に出会い、学習課題を立てよう・・・・・・・・・・3時間 ①『縫うこと』に出会う ② 学習課題を設定する
追求する	2 手縫いの技術を身に付けよう・・・・・・・・・・8時間 ①「追求の活動Ⅰ」を行う ②「追求の活動Ⅱ」を行う
生かす生活に	3 家族に作る布製品の計画を立てよう・・・・・・・・・・1時間 ① 学習を振り返り、家庭生活に生かす方法を考える

(5) 授業の実際

1) 『縫うこと』に出会い、学習課題を立てよう(第1, 2時)

① 縫うことに出会う

○ 衣服の始まりについて知る

まず、衣服の始まりはどのようなものだったのか、想像させた後、衣服は、毛皮を身に付けることから始まり、その後、織ってできた布を身に付けたことが、衣服の始まりであることを、機織りの写真を見せるなどして、教師とのやりとりの中でとらえさせた。そして、当時織ることができたのは30cm幅の布であったことを伝え、どのようにして30cm幅の布から衣服を作っていたのか考えさせた。その後、30cm幅の布を縫い合わせることで、貫頭衣のような衣服になっていたことを知らせた。

T1: 衣服の始まりは何だと思いますか。

C1: 毛皮

C2: 葉っぱ

T2: 衣服の始まりは、動物の毛皮だと言われています。しかし、動物を狩ることは簡単ではなかったと思います。毛皮を手に入れることが難しかったとすると、当時の人たちは他の物で衣服を作らなくてははいけません。毛皮以外にどんなものを使っていたのでしょうか。

C3: 布

T3: 植物から作った糸を使って織って、このような30cm幅の布を作っていました。

C4: それだと幅が狭くて服にならないと思う。

T4: そうですね。では、この布を使ってどのようにして衣服を作っていたのでしょうか。

C5: 縫い合わせていたと思う。

T5: 当時の人たちは、縫い合わせるということを考えだし、衣服を作っていたのですね。

C6: そんな昔から縫うことがあったなんてすごい。

＜児童の様子＞

縫うという行為があることは知っている子どもたちも、縫うということが、いつ、どのようにして生まれたのかということについて興味深い様子であった。また、「自分も縫えるようになりたい」「貫頭衣を作ってみたい」というように、『縫うこと』に興味をもつ様子も見られた。

○ 貫頭衣を製作する

30cm幅、長さ1mの麻製の布を4枚班に配布し、それらを縫い合わせ貫頭衣を作らせた。最初は、2枚の布を縫い合わせて、1枚の大きな布を作らせた。その後、その大きな布2枚を合わせ、貫頭衣の肩の部分にあたることを縫わせ、貫頭衣を完成させた。(ここでの子どもたちは、針にも糸にも家庭科の授業で触れておらず、縫い方についてももちろん学習していない。そんな子どもたちでも縫うことを体感できるように、ここで使用する布、針、糸は特別な物を用意した。(6)教材・教具について参照)



【2枚の布を縫い合わせて1枚の大きな布にしている様子】



【貫頭衣の肩の部分にあたることを縫い合わせ、貫頭衣にしている様子】

T 6：貫頭衣作りを通して感じたこと、考えたことはありますか。

C 7：簡単に楽しく縫い合わせることができた。

C 8：昔の人の知恵はすごいと思った。

C 9：昔の人が縫うことを考えたからこそ、今のような衣服があると実感した。

＜児童の様子＞

「どうやって縫う？」「表から裏へジグザグに縫おう」と言いながら、どのようにして縫ったらよいかわからない子どもたちも、意見を出し合いながら貫頭衣作りを行っていた。また、より丈夫になるように、縫い目の見た目がよくなるようにと縫い方を工夫していて、縫うことに興味を示している様子も見られた。終始子どもたちは楽しそうにして活動していて、完成した貫頭衣をうれしそうに試着していた。

② 学習課題を設定する（第3時）

まず、身の回りにある布製品に改めて目を向けさせ、観察させることで、縫う技術が自分たちの生活に密着していることや欠かせないものだという思いをもたせた。その後、これから学習していきたいことを考えさせ、その内容を基に学習課題を設定した。

T 7：身の回りにある布製品を観察してみましょう。気付いたことはありますか。

C 10：ほとんどの布製品が縫って作られている。

C 11：いろいろ見ていたら、布製品だけでなく、革製品も縫われていた。

C 12：縫う技術があれば、身の回りのいろいろな物を作ることができる。

C 13：『縫うこと』は、家庭生活に密着していて、欠かせないものだ。

＜児童が考えたこれから学習していきたいこと＞

- ・ 縫う技術を身に付けたい。
- ・ 身の回りにある布製品を、自分の手で作ってみたい。
- ・ いろいろな縫い方を身に付けて、家族がほしいと思っている布製品を作ってあげたい。

学習課題

手縫いの技術を身に付け、家庭生活で使える小物を作ろう

2) 手縫いの技術を身に付けよう

①「追求の活動Ⅰ」を行う（第4～8時）

○ 基本的な縫う技能を身に付ける

拡大模型や玉結び玉どめの模範ビデオなどを用意した学習コーナーを利用して、基本的な手縫いの技能（針への糸通し、玉結び、玉どめ、なみ縫い、返し縫い、かがり縫い）を身に付けさせた。

○ 基本的な縫う技能を定着させる

簡単な小物（葉っぱ型のコースター）の製作を行っ



【葉っぱ型のコースター】



【玉どめで模様付け】

た。葉っぱ型のコースターを完成させるためには、学習コーナーを利用して身に付けた基本的な手縫いの技能の全てを使用しなければならないようにした。コースターを製作中に、縫い方などを忘れてしまった子どもがいた際には、学習コーナーに行ってもう一度確認させるなどして、技能を定着させていった。

②「追求の活動Ⅱ」を行う（第9～11時）

○ 目的や縫う場所に合わせた縫い方を知る

なみ縫いだけで製作してふたの部分などがほつれてしまっているペンケースや縫い目を粗くして鉛筆が外に出てしまうように製作したペンケースなどを提示して、ペンケースの使用目的や、ふたになる部分やそこになる部分など場所によって縫い方を変える必要があることに気付かせた。

○ ペンケースづくりの計画をして、ペンケースを製作する

強度や見た目の良さなどを考えながら、どの縫い方を使って製作したらよいか、計画を立てさせた。そして、その計画に従って、ペンケースの製作をさせた。

3) 家族に作る布製品の計画を立てよう

① 学習を振り返り、家庭生活に生かす方法を考える（第12時）

これまでの学習を振り返り、身に付けることができた知識及び技能を確認させた。また、その知識及び技能はどのような時に活用できるのか考えさせた。その後、家庭生活でどのように活用していくか考えさせ、その計画を立てさせた。

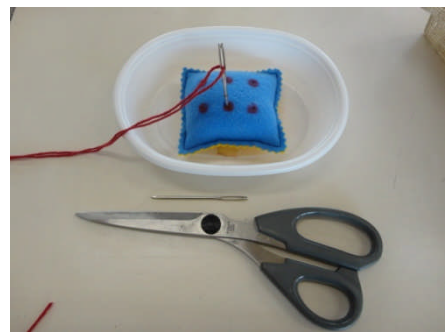
(6) 教材・教具について

縫うことに出合う段階での貫頭衣作りで使用した布、針、糸は、前述したように、特別なものを用意した。通常の縫い針は、細くて糸を通す穴も狭い。初めて縫う体験をする子どもたちには扱い辛い。そこで、編み物用の綴じ針を用いた。綴じ針は、縫い針に比べ太く長い。そして、糸を通す穴も広がっている。何しろ先があまりとがっておらず、けがの心配が少なくなる。ただし、綴じ針では、普通の布を縫うことは難しい。針の先が太いため、布を貫通させるのが難しいのである。そこで、綴じ針でも貫通するほど縫い目が粗い麻の布を用いた。縫い糸も針と布に合わせて太くほつれないようによりの強いものを用いた。太く赤い糸は、縫い目の粗い麻の上でもよく目立ち、縫い合わせているということを視覚的にとらえやすくすることができた。

これらのように、針、布、糸に工夫を加えたことで、まだ裁縫用具に触れたこともない子どもたちでも、昔の人になりきって貫頭衣作りを行うことができた。



【綴じ針と糸】



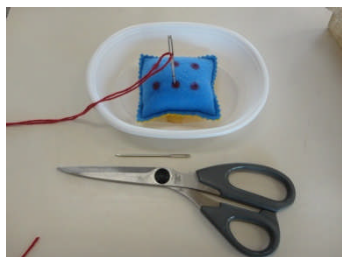
【綴じ針の大きさ】

3 実践のまとめ

子どもたちが主体的に家庭生活にかかわることができるようにするために、『縫うこと』と家庭生活とのかかわりを意識して知識及び技能を自ら進んで身に付けようとする態度を育てることをねらいとして実践を進めた。

縫うことに出合う場面では、貫頭衣作りという体験的な活動を通して、縫うことそのものに興味をもったり、縫うことと家庭生活とのかかわりを感じることができたりした。そのため、その後に縫うことの基本的な知識及び技能を身に付けるときにも、生き活きとした表情で主体的に学習に取り組み家庭生活で活用できる日を見据えながら活動に取り組むことができていた。

写真データ



貫頭衣について

附属名古屋小学校 被服構成実習から

家政教育講座

加藤祥子

貫頭衣とは布の中央に穴をあけ、そこに頭を通して着る、原始的な形の衣服である。素材が 50 cm ほどの広い幅のものなら頭の通る穴を開けることが必要であるが、今回使用した 30 cm ほどの狭い幅なら 2 枚を縫い合わせる時点で縫い残して、そこから貫頭するのが構成上一番簡単な方法である。穴を開けるとほつれるためその防御策も必要だ。

附属小学校の児童が体験した貫頭衣は、中心で縫製されており、テーブルに置けるよう短いサイズになっている。従って、肩の縫合も考えることになる。太い針と太い糸を使って縫うことで、時間短縮にもなっている。肩の縫合に角度を持たせたり、中心線に垂直に縫ったりすることで出来上がりの形態も変化し、それによるデザインを楽しむこともできる。縫合の糸が赤いことから縫製の目印にもなり、これもデザインになっている。写真を見ると中心の縫合が、なみ縫いに混じって、かがり縫いもあり、実際には綺麗に整った縫い方ではないが、それがまたおもしろく、2 枚の布を縫い合わせる目的だけに縫っているのではないデザインのようにも見える。なみ縫いに比べて端が離れず、実用性を兼ねている。

出来上がった状態に置いて縫い合わせていることから、中表で中心を縫っている例はないように思われるが、一番目立つ部分となる前中心線を太い赤い糸で縫うことを考えると「縫う」という作業より、置いて押さえて 2 枚を合わせる作業のようだ。時間短縮とデザインのおもしろさ、グループで一着を作り上げ、着用するまでの「わくわく」が伝わってくる内容である。

今でも、ポンチョという形で残っている貫頭衣はサイズの設定がほとんどなく、身長差も体格差もなく着用できることから、グループで一着を着回しできる数少ない服種である。衣服内での体格差で様々な表情を見せ、楽しい試着になったことが伺える。

ここ数年、ポンチョが流行している。流行と同調して教材として楽しいものであったに違いない。